

『赤い鳥』再考

— 児童文学史の未熟 —

関 英 雄

俳人小林一茶を生んだ人口一万二千たらずの長野県信濃町が、黒姫高原の町有地に「黒姫童話館」という近代建築の児童文学常設展示館を予算十一億で建設中で、平成三年夏開館の予定だ。信州出身またはゆかりの島崎藤村、坪田譲治ほかの作家の著作・資料を中心に、ミヒャエル・エンデがこの童話館に直接寄贈したエンデに関する全資料も展示される。地方の小自治体の事業としては刮目に価しう。

そこで同町は二年夏から月刊の広報『しなの』に「童話の散歩道」という頁を設け、この頁に雑誌『赤い鳥』のことを町の人たちにわかる文章で書いてほしいと私に頼んできた。縁あって童話館の建設現場を見学した私は喜んでひきうけた。藤村も譲治も『赤い鳥』ゆ

かりの作家であり、日本の近代児童文学の歴史を拓いた雑誌『赤い鳥』（鈴木三重吉主宰、大正七年創刊、前期・後期合計百九十六冊を出して昭和十一年三重吉の死で廃刊）なくしては童話館も始まらないのだと思った。

「町の人にわかる文章で……」という依頼の文面に、私は町の商店主や農家のおばさんの顔がうかび、これは骨がおれると思った。

「わかる文章」は「親しめる文章」でなければならず、私は反射的に、大正後半期の小学生だった私がそのころ初めて出会った『赤い鳥』は、すぐには親しめない雑誌だったことを思い出した。そこでこの稿は体験的『赤い鳥』再考の小論である。

大正十一年（一九二二）東京の小学校の五年生の私は、貧しい母子家庭の子で、月に雑

誌一冊買ってもらうのがやっとだった。その私に二階の下宿人の早大生Nさんが、『赤い鳥』を街の書店で見つけて買ってきてくれた。それは私に「世の中にこんな雑誌もあったのか」という新鮮なおどろきを与えた。『赤い鳥』という誌名も珍しかったが何よりもカラーの表紙絵と口絵の美しさに心惹かれた。どちらも『赤い鳥』の看板画家の清水良雄の絵だったと思うが、何を描いた絵だったか絵柄までは思い出せない。当時、今の漫画雑誌のように街の本屋の店頭に山積みになっている『少年倶楽部』のような少年大衆誌なら、どの雑誌も表紙絵は目の大きなリリしい男の子の顔、『少女世界』のような少女娯楽誌なら黒い大きな瞳のうるんだ少女の顔と決まっていたのに対し、西洋の童話のようなムードを

たたえた『赤い鳥』の表紙絵だった。

けれど決定的な物たりなさは、他の少年雑誌に比べて頁がうすく、胸を踊らす連載冒險小説とか、私が店頭山積み組の雑誌の一つ『日本少年』で愛読していた松山思水の滑稽小説のような読物は一つもなかったことだ。

目次に行儀よくきちんと納まったどの童話も読物も、どこか取りすました品のよさがあって、取りつきにくかった。他の少年雑誌の読物を子どもの口に入り易い駄菓子にたとえるなら、『赤い鳥』の童話や読物は庶民の子の食べつけない高級洋菓子というところだったか。私が『赤い鳥』になじむまでにはその後なお二、三年の月日を要した。私がその頃街の本屋で『赤い鳥』を発見しえなかったのは、店頭山積みの少年少女誌と違って、店の奥の平台に大人向きの短歌、俳句その他少数発行の趣味の雑誌の間に、ほんの三、四冊重ねてあったためだ。因に、『赤い鳥』の最盛時の大正十年にその発行部数は三万といわれ、後には一万余を大きく割っている。

ところで昭和四十年四月末からの一週間、東京・新宿の伊勢丹百貨店で、毎日新聞主催の「子どもの本この百年展」(副題・日本児童文学の流れ)が開催され、児童文学好きで

知られた今の皇后の美智子妃(当時)が見学

に見えた。私の属する日本児童文学者協会はこの大規模な展覧会の後援団体の一つで、私は大正期のコーナーの展示物の飾りつけなどもやり、このコーナーの美智子妃へのご説明役だった。まだ『赤い鳥』の復刻版が出る以前だったが、鳥越信氏提供のガラスケースの中に飾られた何十冊かの『赤い鳥』の現物をご覧になった美智子妃は、

「この『赤い鳥』のような良い雑誌が、どうして当時の子どもたちにもっと広く読まれたのかだったのでしょうか?」

と質問された。私はお答えした。

「理由は三つ考えられます。第一は、鈴木三重吉個人の発行で大新聞に広告するような宣伝力のなかったことです。第二は、三重吉自身が書いていたように多くの家庭が子どもの読物に無関心だったことでしょう。第三は、一般の子どもにとって内容が少し高尚すぎたかと思われることです。」

美智子妃は「わたくしもそう思っております。三つの理由のうち第一第二は子どもの立場で考えれば大人のいいわけにすぎない。第三の「内容が少し高尚」こそ多数庶民の子たちから『赤い鳥』を遠ざ

けた理由で、三重吉が童話に限らず科学読物、歴史物語等にも一流の執筆陣を動員して子どもに呼びかけたにもかかわらず、三重吉の教養主義は雑魚のような子どもたちにはどこか固苦しかったのだ。『赤い鳥』の先駆性は争えないが、それは少数知的エリートの子たちの雑誌だった。

だが三重吉を責められないのは、封建遺制が色濃く残る大正近代に初めて花開いた児童文学は、成人文学と異なりおかれて来た文学だったことだ。大正後期に明確になった純文学と大衆文学の分裂が拍車をかけ、純文学系列の『赤い鳥』が子ども大衆に違和感を与えたのは自然だった。日本「近代」の未熟がそのまま児童文学史の未熟となった。にもかかわらず現代児童文学の多様な発展に最初の布石を置いたのは『赤い鳥』である。現代児童文学には「純」と「大衆」の背反的区別はもうなくなつた。子どもの立場に立つ児童文学の本来の姿である。